国際理解教育の推進
～特色ある教育の再構築をめざして～

竹川由紀子
鳥取大学附属中学校　英語科
E-mail: takekawa_yk@tottori-u.ac.jp

TAKEKAWA Yukiko(Tottori University Junior High School): **The promotion of international understanding education "Aiming to reconstruct distinctive education"**

要旨　－　本校では 2014 年度より英国の学校と生徒同士の文通交流を始めた。2015 年，2017 年には英国より生徒を迎え，両国の生徒同士が授業で交流した。しかし，隔年で実施してきたこの交流はコロナ禍を境に途切れてしまう。本校が積み上げてきた他国との交流を継続し，今後も教育の柱として根付かせることが重要かつ，本校独自の特色ある活動としたいと考え，実現可能な国際理解教育の在り方を示した。

キーワード　文通交流，コロナ禍，国際理解教育

Abstract —　In 2014, our school began pen-pal exchanges with schools in the UK. In 2015 and 2017, we welcomed students from the UK, and students from both countries interacted in class. However, this exchange, which had been held every other year, came to an end due to the coronavirus pandemic. We believe that it is important to continue the exchanges that our school has accumulated with other countries and make them a pillar of education in the future, and that we want to make our activities unique to our school.

Key words —pen pal exchange, coronavirus pandemic, international understanding

1.　はじめに
1.1.　国際理解教育

本校は，平成 22 年よりスペイン・ムルシア市立カスカレス中等学校と平成 27 年度より英国のニューステッド・ウッド。スクールとの国際交流を始めた。カスカレス中等学校との交流では，美術作品を通した作品展を開催するという交流を実施し，ニューステッドウッドスクールとは，生徒同士の手紙のやりとりから対面での交流を実施し，現在に至る。

2.　英国生徒との交流

2014 年度から始まった文通交流。英語の授業での英文で手紙を書く指導の一環として，それまで教員同士の交流が行われていた英国ニューステッドウッドスクール(Newstead Wood School)の生徒と本校の生徒との手紙のやりとりが始まった。生徒は自分で伝えたいことを書き，趣味や好きなことや好きな食べ物やスポーツなどさまざまなことを手紙に書く。翌年の 2015 年には初めての生徒同士の交流を実施することができた。以降，隔年ごとの英国生徒の来日があり，2015 年，2017 年，2019 年に国際交流事業を実施した。

2.1.　国際交流①（2015 年度）

2015 年 10 月。英国より生徒を迎えた国際交流プログラムが始まった。日本語の授業を選択し学習している英国生徒が研修として来日するもので 2 年に一度のプログラムである。英国の学校より，申し出があり2015年度，同校と1回目の国際交流プログラムが実現した。生徒会主催の歓迎式典に始まり，生徒会長の英語による歓迎のスピーチ，茶道部のお手前と有志による箏の演奏など和の文化を存分に披露した。鳥取県のマスコットキャラクターのトリピーや鳥取大学のマスコットキャラクター，とりりんに扮した生徒の登場で日英両生徒は大喜び。（写真（1））事前の準備では，校舎内の教室の日本語表示を英語掲示や英国生徒を歓迎するウエルカムポスターの作成，歓迎式典での鳥取紹介のプレゼンテーションなど英国生徒を迎えるためのサポートに多くの生徒が協力し，自ら国際交流を楽しもうとする意欲が多く見られた。

授業では，英語を中心として，保健体育（女子ソーラン節披露），校外学習として，砂丘散策を実施した。授業での交流では，言葉だけでなく身振り手振りで必死になって動き方を伝えようとする本校生徒に英国生徒も最後は汗をかきながら懸命に覚えようと応えていた。全1・3年クラスが，英語・保体の授業で英国生徒と交流した。

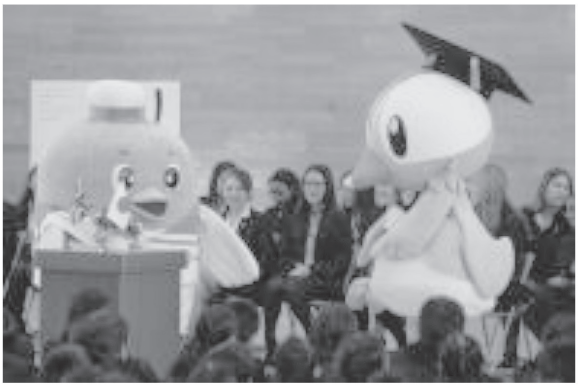

写真1　2015 年度交流の歓迎セレモニーの様子

2.2.　国際交流②（2017 年度）

2017 年 10 月。二度目となる国際交流プログラムを実施した。英国より生徒を受け入れ，鳥取での滞在期間は，本校生徒の家へホームステイの形で宿泊する。鳥取で滞在する 10 月 21 日から 25 日までの 4 泊 5 日間，ホストファミリーの受け入れが可能な家庭の募集を 5 月より開始した。以前にも受け入れたことのある家庭や今回初めての受け入れとなる家庭もあった。PTA，懇話会の方々の協力もいただき英国生徒 21 名のホストファミリーが決定した。全 12 クラスの生徒が，学活，英語，保体等の授業で英国生徒と交流を深めることができた。

写真2　2017 年度交流の歓迎セレモニーの様子
英国生徒 23 名と引率教師（3 名）

2017
国際交流

鳥取大学附属中学校
×
NEWSTEAD WOOD SCHOOL
ニューステッドウッドスクール

日時
2017年 10月23日（月）
10月24日（火）

交流内容

イギリス・ニューステッドウッドスクールより生徒23名が来校し、交流を行います。10月21日にはイギリス生徒とホストファミリーが対面し、4泊5日間のホームステイが始まります。
附属中学校での交流は、23日・24日の二日間です。学年やクラスで様々な交流が予定されています。外国の生徒と関わったり、気持ちを伝えたりするための「やりくり」を一人ひとりが考え、実践してみてください。
自分や日本のことを伝えたり、英国生徒の発表を聞いたりする中で、自国や外国、それぞれの良さをたくさん見つけてください。
全校生徒で英国生徒を温かく迎え、互いに深い学びを実感できる国際交流にしていきましょう。

日程

23日（月）
1 限　歓迎セレモニー
　歓迎メッセージ
　茶道部点前披露
　和楽器演奏
2 限　1年生との交流
3 限　1年生との交流
4 限　2年ＡＢ組　保体
給食（多目的室）
　ホストファミリー生徒
　ペンパル生徒
　英国生徒で会食
5 限　3年　Ｂ組　書道
6 限　3年　Ｄ組　書道
放課後
　歓迎茶会（茶道部）

24日（火）
1 限　3年　Ａ組　学活
2 限　3年　Ｃ組　学活
3 限　2年ＣＤ組　英語
移動・昼食
4 限　鳥取観光
5 限　鳥取砂丘
　砂の美術館
6 限　鳥取大学
　留学生との交流

図1　2017年度　国際交流ポスター

2.3.　国際交流③（2019 年度）

対面での交流も三度目となり，受け入れる学校も前回の反省を生かして，各担当で準備を進めることができた。事前の準備としては，国際理解担当で，ホストファミリーの募集や決定し全クラスで交流ができるようなカリキュラムの設定等を行った。

例）
○国際理解担当＝ホストファミリー募集
　事前説明会の実施，
　交流プログラム（授業案の立案）
○生徒会担当＝歓迎セレモニーの計画・運営
○各教科担当（英語科）＝言語（英語）でのやり取りを中心とした授業プランづくり
○〃（英語科以外）＝非言語で活動できる授業プランづくり
○茶道部＝歓迎セレモニーでのお点前準備
○吹奏楽部＝同セレモニーでの演奏会準備
○担任＝ホストファミリーの把握

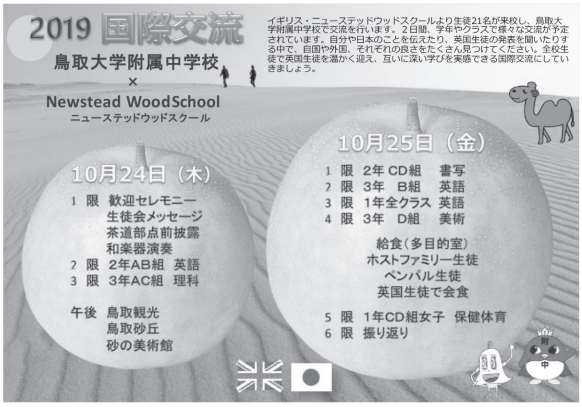

図2 国際交流ポスター

全てのクラスで交流することができ，英語だけでなく，実技教科（保体・美術）でも両校の生徒が共に学びを深めた。また，日本文化（書写）では，鳥取大学より住川英明様を講師に招き，日本人生徒が英国人生徒へ作法を伝える形での授業を行った。

第3学年では，事前に生徒にどのような交流をするのがよいかアンケートをとり，授業づくりから当日の司会進行をすべて生徒に任せた。活動を通して見えてきたものは，言葉は単にコミュニケーションのツールではなく，そこに人柄や感情を込めることで，言葉が本来持っている意味以上の気持ちや思いが相手に届くということであり，それが語学を学ぶおもしろさである。ことに気づきつつある生徒が増えてきている事であった。アウトプット活動の醍醐味はまさに「伝える」と「伝わった」が双方向に結ばれるときであり，その瞬間がこの交際交流で多く積み重なったようである。

第2学年では，「日本の文化を紹介しよう」というテーマで班ごとに何を紹介して一緒に交流するかを考えた。折り紙，あやとり，けん玉など伝統的な日本の遊びやかるたや将棋，福笑いなど日本人にとってはなじみのものを，外国の生徒にどのように伝えたらいいのかを試行錯誤していた。

当日はインタビュービンゴのあと，それぞれが用意した日本の遊びをイギリスの生徒たちと楽しんだ。ジェスチャーや知っている単語をやりくりしながら一生懸命に伝えようとする日本の生徒や，日本文化をたくさん知って帰ろうとするイギリス人の生徒たちの温かい交流の時間となった。

写真3 交流授業「保体」
身ぶり手ぶりでコミュニケーションをする生徒たち

交流プログラムでは，英語科以外の教科でも交流を行った。保健体育でソーラン節を披露して一緒に踊るというものである。保健体育の教員が両国の生徒へ向けた日本語と英語の指示を「やりくり」する。生徒だけでなく，教師側のやりくりが生まれた交流となった。英語科だけでなく保健体育，学級活動，書写などそれぞれの専門性を生かし，多くの教科担当の教員が関わることですべての生徒，職員が主体となって取り組むことができた。
国際交流というと英語科が担う部分が多いが，今回の交流では英語科を中心として，他の教科の教員も積極的に授業を提供し，生徒の「やりくり」ができる場面を設定した。

2.4. 国際交流④（2021 年度））

2019 年（令和元年）末からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行による災難や危機的状況により，本校と英国 NWS 校とが隔年で行ってきた国際交流は中止となった。隔年での交流を待ち望んでいた生徒にとっては残念なことであった。2019 年度の対面交流を最後に，本校が 3 回行ってきた対面での交流は一時中止となり，今後の対面交流は未定である。

3. アデレード生徒との交流

3.1. 交流のきっかけ

2015 年 4 月，当時の外国人指導助手である Shirley Leane がオーストラリア出身であり，地元のアデレード大学の教師とかかわりがあったため，両校の学生同士の交流ができないかとの話から交流が実現した。

3.2. 交流内容

アデレード大学の学生が研修の一環として，来校。2015 年度は 1 年生の英語の授業で対面交流を行った。知っている単語で自己紹介をしたり，ゲームをしたり，歌ったりと言語，非言語を用いた交流の時間となった。入学後すぐの交流では，積極的に関わる生徒や言葉に詰まって消極的な生徒などさまざまな様子が見られた。

写真 4 アデレード大学の学生との交流

多くの生徒は外国人との交流を楽しみ，外国を身近に感じられる授業となった。

4. カスカレス校（スペイン）との交流

4.1. 交流のスタート

2010 年度（平成 22 年度）鳥取大学附属中学校は，スペイン・ムルシア市のフランシスコ・カスカレス中等学校と美術作品を通した国際交流を開始している。カスカレス校では，両校生徒作品の展覧会が行われた。

4.2. 交流事業（2012 年度）

2012 年度（平成 24 年度）には，同校より数名の先生方が来校し，授業の様子（美術）を視察。両国の美術科が連携し，互いの国の生徒作品を一斉に紹介する展示会を開催された。（写真 5）スペインでは，会の趣旨を次のように示されている。

The main aim of this exchange is to let student know about the different aspects and techniques of traditional arts in our respective countries. ―*交流の目的は，それぞれの国の伝統的な作品のさまざまな側面と技術を生徒たちに知ってもらうことである。*

写真 5 2012 年作品展示会の様子（スペイン）

5. 生徒作品展（2015 年度～2019 年度）

5.1. きっかけと目的

カスカレス校で開催されている本校生徒と同校の作品交流展は，スペインで好評である。同様に日本でも開催することで互いの交流の様子を広く示したいと考え，2014 年度に国際交流生徒作品展を実施した。

5.2. 内容

美術科では，スペインが生んだ巨匠ベラスケスの名作《ラスメニーナス（女官たち）》の色面構成（カスカレス校生徒作品）と，水墨画（鳥大附属中学校生徒作品）を展示した。英語科では，日本文化を英語で説明したカードを展示した。（写真 6）年に一度，1 月上旬開催として，2019 年度まで作品展を継続して行い，本校の特色ある国際理解教育を多方面へ示すことができた。また，本校と他国の学校との交流の歴史を広く紹介できた。

写真 6 国際交流生徒作品展 2014 年度

写真（７）国際交流生徒作品展　2019 年度

5.3.　交流展の成果とこれから

国際交流を柱とした生徒作品展を継続して実施するためには，特定の教科だけの実践でなく，全教科・全領域で国際理解教育を推進していく必要がある。2015 年度以降，隔年で行ってきた対面交流では多くの教科で生徒同士が交流を深めた。交流展では美術，英語科以外の授業での生徒同士が交流している様子を写真で紹介した。作品展は，年々作品数が増し，美術作品展示を中心に英語科やその他の教科の取り組みも紹介し，本校の特色である国際理解教育の推進を広く社会へ示す年始の恒例行事となった。

しかし，コロナ禍により平成 31 年度（2019 年度）の国際交流生徒作品展を最後に再開することができずにいる。対面交流はできないが，英国生徒との交流は続いており，それを発信していく手段を考えるべき時期が今である。

本校が担う「国際理解教育の推進」について，今までの歴史を大切にしながら，全教科で再構築していく必要がある。

年に一度，文化祭の作品展示では，生徒の学習成果を広く示す機会がある。本校の国際理解教育を発信するブースをつくり，各教科の学習成果を示すことは実現可能であるため，次年度より，実践できる。

6.　特色ある教育の再構築をめざして

6.1.　生徒の意識調査

コロナ禍を経験した生徒たちの，英語や外国に対する意識を確認するため，「英語学習の目的」についてアンケートを実施した。

対象学年：中 2

実施時期：10 月

「英語学習の目的」の問いでは，学年で 6 割程度の生徒が，「新しいことを知りたい」という気持ちから英語学習に取り組んでいることが分かる。また，学年で 7 割程度の生徒は，「他国の人と知り合いになれること」が英語を学ぶ目的の一つであると考えていることが分かる。（表2）

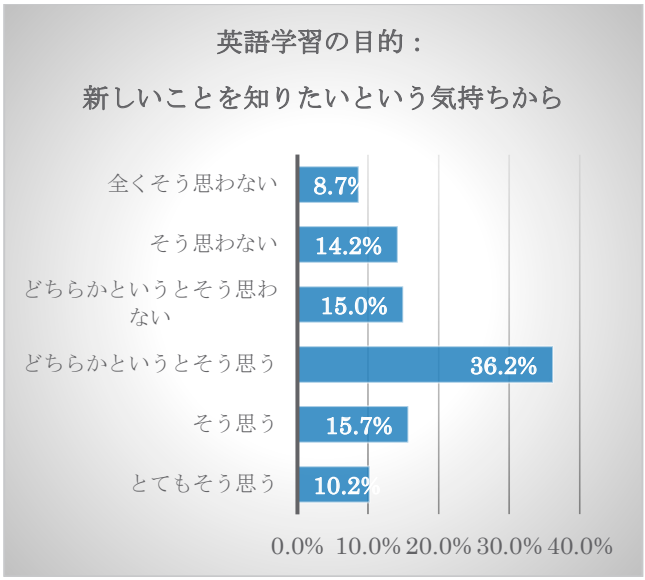

表 1　英語学習の目的についての調査①

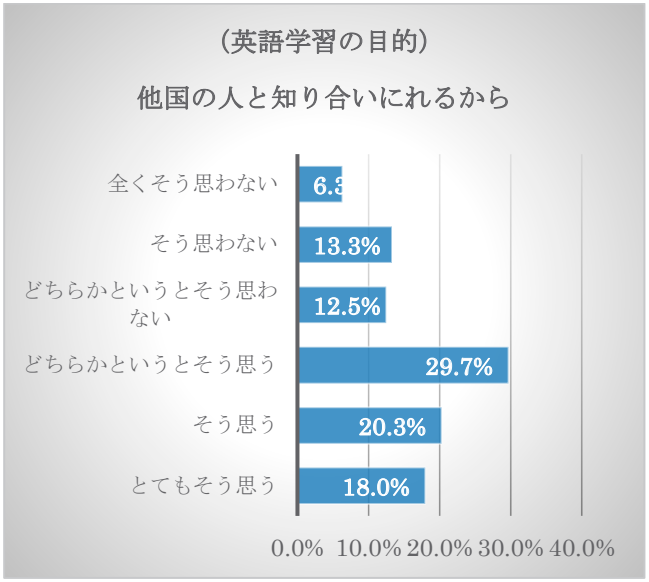

表 2　英語学習の目的についての調査②

多くの生徒が他国の生徒との交流を前向きに考え，英語学習を通して多くを学びたいと考える一方で，他者との交流に消極的な生徒も見られた。他国の学校との交流を定期的に行い，継続して実施することで生徒の英語学習や他国の生徒と関わろうとする意欲は高まると考えられる。

6.2. 国際交流（2022 年度～2023 年度）

2019 年度の対面交流を最後に，英国生徒との対面交流は停止している。コロナ禍が過ぎ，対面交流を期待したが，相手校の事情により，鳥取（本校）への訪問を実施しないことが伝えられた。それに代わる交流として，以下のことを試みた。

6.2.1 実践例

① 英国生徒との手紙のやりとり

2022 年度 12 月に日本から英国へクリスマスカードを送った。2023 年度 7 月には英国生徒から日本生徒へ返事の手紙を書き交流した。

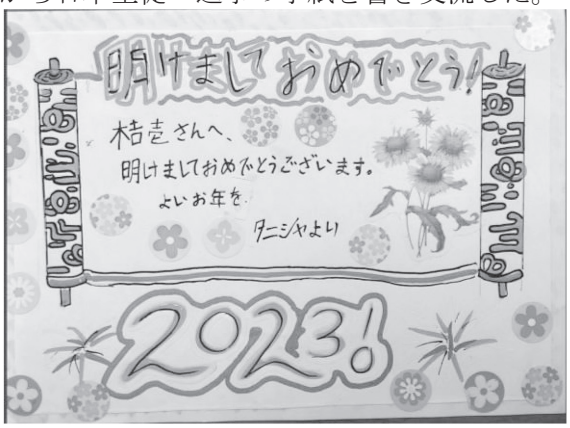

写真 8 英国生徒が書いたカード

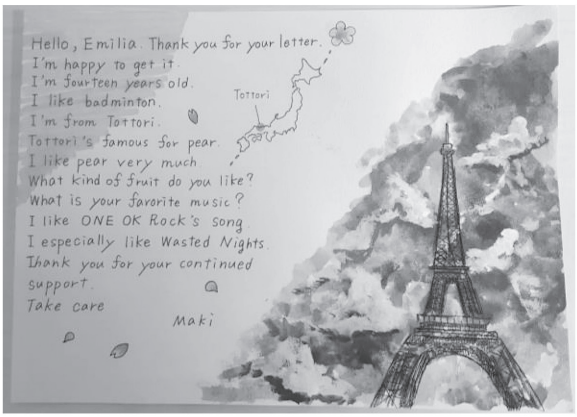

写真 9 日本生徒が書いた返事

2014 年から続く NWS 生徒との交流は手紙から始まった。本校では，国際理解教育担当が窓口となり，互いの生徒同士の交流をサポートした。英国 NWS の代表は，Bunting 久佳さん（2014 年度から 2020 年度），Benney 佳子さん（2020 年度から 2023 年度）が窓口として，本校英語科との交流を続けている。今回の手紙のやり取りは，Benney 先生と竹川とが主となって行った。この交流が定着すれば，1 年英語担当と英国 Benney 先生とが時期を決めて手紙のやり取りをすることで今後も英国生徒との交流が実現可能である。

手紙のやりとりの良さは，生徒同士が書いた文字を直接相手に伝えられて，実物の手紙でやりとりができることである。イメージ画像をメールに添付することはできるが，便箋の質感や，文字の濃淡，色合いなど，実際のものを手にすることで感じられる喜びは大いにある。

課題となる点は，手紙を書いてから相手校へ送るまでにかかる所要時間と内容物の申告に関わる手続きの煩雑さである。電子メールは瞬時に相手に届くメッセージも，実際の手紙は郵便局，税関等を通過し，少なくとも到着までには 10 日から 2 週間はかかる，

数年前までは，内容物について特に別紙に申告しなくても国際郵便 EMS を利用して送っていたが，セキュリティ強化のため，海外へ物品を送るときは，必ずその内容物について申告し，税関を通過させなければならない。

今回，手紙に加えてマスキングテープを送った生徒があり，申告をせずに送ったため，英国の税関まで荷物が届いたが，申告なしのため英国への郵送はストップされてしまった。内容物の申告書を作成して再度郵送したが，約 2 か月以上の時間を要して，手紙が到着した。担当者にとって，その都度内容物の申告をする手間が必要であり，時間のかかる手続きが必要となる。

写真 10 日本生徒からの手紙を受け取り喜ぶ英国生徒

② 新しい交流校の開拓

英国 NWS 校との交流は年に数回行い，生徒同士の交流ができ，今後も継続の方向性が根付いている。今年度，前任の外国語指導助手 Shirley Leane 先生の協力のもと，豪州 Seaview High School に勤務する Angela 先生と連絡を取り合うことができた。両校が交流できることを望まれており，オンラインで交流が可能かどうかを，まず

教師同士がやり取りを行った。以下は，パドレット（Padlet）を用いた自己紹介の例である。 **図 3**

図 3　Padlet を利用した自己紹介

上記はオンライン上でのやり取りであり，授業の中で瞬時にやり取りができる。比較的時差のない日本とオーストラリアでは，同じ時間での交流が英国よりも容易となる。

先述の英国生徒とのやり取りは，中１～中２での実施が想定されるため，オンラインでの交流でのやり取りが実現可能である。豪州生徒とのやり取りは，中２～中３での実践が適切である。外国語指導助手のマイケル先生がオーストラリア出身であり，交流には前向きであるため，協力を得ながら，オンライン交流をすることは可能である。

7.　まとめ

本校と他国との交流を整理しながら，今後実現可能な交流を考えて交流を試みた。本校と他校との交流は，コロナ禍で一時的に停止したものの，両校が築いてきた関係は，大きな財産として今後に根付かせるべきである。また，各学年の交流の在り方をシステム化することで，英語科（または学校全体）のカリキュラムとして継続可能な交流ができる。

以下は各学年で実現可能な交流活動である。

1 年時　12 月にクリスマスカードの作成
　　英国生徒への初めての手紙を郵送
2 年時　4 月～6 月
　　英国生徒から返事を受け取り
　　特定の相手との交流を継続
3 年時　オーストラリア Seaview 校との交流
　オンライン交流
　　*English の授業で実施可能

注 English…外国語指導助手マイケル先生が指導する英語授業。

異文化で生活する者同士の交流では，相手が置かれている社会や文化について考えながらの自己発信となるため，交流場面では，常に発信と受信のやりくりが行われる。生徒同士の交流活動は，年間で数回であるが，実際の相手を意識しながら手紙を書いたり，オンラインで即興のやり取りをしたりする活動は，生徒にとって時間以上の学びとなる。他国から届いた手紙を生徒へ渡すと，どの生徒も瞳をキラキラ輝かせて，異国への思いを馳せ，今後の英語学習への大きな動機づけとなる。

自己を知り，多様な考え方に気づき，他者とともによりよい社会を創造しようとする生徒の意欲をはぐくむために，国際理解教育の推進は欠かせない。英語を学ぶことは，単なる知識の積み上げだけにとどまらず，新しいことを知り，他国の人とつながりを持ち，自身の視野を広げることも目的の一つである。本校の生徒には，国際交流で他国の生徒とつながることを通して，自分を発信したり，相手を受け止めたりしながら社会をつくる一人となってくれることを期待したい。

8.　参考文献

足立和美（2016）『地域教育学研究8巻1号』
鳥取大学地域学部
藤村宣之ほか編（2018）『協同的探究学習で育む「わかる学力」』ミネルヴァ書房